

論文

## ボリス・ゴドゥノフ帝の金貨2種

### Two Types of Gold Coins of Tsar Boris Godunov

安木 新一郎

YASUKI Shinichiro

要旨

ロシアのツァーリ（皇帝）ボリス・ゴドゥノフはウゴル（チェルヴォネツ）とコペイカという2種類の金貨を発行している。ウゴルの金貨は彼以前のツァーリも発行しているが、コペイカ金貨は独自のものである。ボリス帝がウゴル金貨を発行した理由は、帝位を安定化させるために貴族に対し賜与が必要だったからである。他方、コペイカ金貨は市場流通用だったと考えられる。

キーワード：モンゴル ロシア 貨幣 金貨

## 1. 問題意識

1236年からモンゴル軍はキプチャク草原に侵攻し、1242年までにキプチャク草原とその隣接地域を占領した。この過程でルーシ（現在のモスクワ周辺、ウクライナ中西部、ベラルーシ）もモンゴルに服属し、モスクワ大公イワン3世が定期的貢納を拒否した1480年までの約240年間は「タタールのくびき」の時代と呼ばれている。名目的とはいえ、宗主国であるカシモフ国のスルタン位が断絶するのは1681年で、ロシアに対して貢納を要求し続けたクリム国が滅ぶのは1783年であり、不定期ではあってもモスクワ大公国やロシア帝国はジョチ裔政権に貢納する場合があったが、ロシア史家は1480年をタタールのくびきから解放された年としている。

貨幣流通について見ると、タタールのくびき時代は前後に分けることができる。前期は1360年代までで、ルーシには独自の金属硬貨はなく、グリヴナという棒状の銀塊が秤量貨幣として用いられ、またキイロダカラ（貝貨）、ウクライナ西部・ヴォルニイ産紡錘車、ガラス玉などが使われており、「無硬貨期」と呼ばれている。1360年代からリトアニア領キエフやニジニノヴゴロドでジョチ朝（キプチャク・ハン国）の硬貨をまねた銀貨や銅貨が発行されるようになり、その後ルーシ各地に貨幣製造所が設けられていった。

基本的にはジョチ朝の貨幣制度はイスラーム圏に属するが、特徴としては銅貨に銀貨との交換比率が打刻される場合がある点と、金貨が主要な貨幣でない点が挙げられる。タタールのくびき下のルーシでも当初金貨は発行されず、徐々にドゥカート金貨、別名「ウゴルの金貨」という西欧風の金貨が使われるようになった。ウゴルとはハンガリーのことで、金貨がハンガリー製だったのでウゴルの金貨と呼ばれていた。

ウゴルの金貨は伝統的なルーシの貨幣とは異なる形状、意匠であり、また市場流通ではなく賜与用だったとされる。これに対して16世紀末にボリス・ゴドゥノフ帝はウゴルの金貨だけでなく、コペイカ金貨というルーシの伝統的な製法で金貨を作った。

1 安木新一郎(2020)「大モンゴルの小額貨幣」、岩橋勝編著(2020)『貨幣史研究』、晃陽書房(近刊予定)。

ロシアにおける中世から近世の貨幣制度の変化について、次の2つの見方ができる。一つは、モンゴル支配から脱し、徐々に独自化が進むが、ロマノフ朝初期の銅貨一揆などで見られるように貨幣制度は混乱し、結果的に1700年のピョートル1世の幣制改革で西欧の制度が導入されたという断絶説である。もう一つは、最初は外国製で賜与用だった金貨が、ゴドゥノフ期に国産化され市場流通用にも発行されるようになり、18世紀以降の金銀銅の硬貨に紙幣を加えた近世の貨幣制度につながっていくという連続説である。

今後の研究の出発点として、本稿ではボリス・ゴドゥノフ帝即位前後の北東ルーシの政治状況と金貨発行の背景について考えることにしたい。

## 2. ウゴルの金貨とコペイカ金貨

図1および図2はルーシのツァーリ（皇帝）ボリス・フョドロヴィッチ・ゴドゥノフ（在位1598年～1605年）が発行した金貨である。

図1はロシア歴史博物館所蔵で、コペイカ銀貨と同じ量目0.68gで非円形である。図2は国立エルミタージュ所蔵で、図1のちょうど5倍の量目3.4g、直径24mmのドゥカート金貨で、「ウゴルの金貨（チェルヴォネツ）」と呼ばれている。以下、スパスキーにしたがい、図1をコペイカ金貨、図2をウゴルの金貨と呼ぶ<sup>2</sup>。

ウゴルの金貨はイワン3世（在位1462年～1505年）やワシリー3世（在位1505年～1533年）の代にも発行されているが、こうした大型金貨は市場で使われるのではなく、臣下への賜与用だと考えられており、また大公あるいはツァーリの即位式では即位した者に貨幣がまかれるなど、儀式で使用されたとされる。図2もまたボリスが賜与のために作ったもので、現存数は6枚だが最近モスクワのヤウザ川でさらにもう1枚発見されたとの報道があった<sup>3</sup>。

図2の左側には国章である双頭の鷲が入っており、右側には5行に分かれて文

2 Спаский, И. Г. (1970) *Русская монетная система*,

(<http://www.arcamax.ru/books/spassky01/spassky23.htm>) (最終閲覧日:2019年4月5日)。

3 『スポーツニク日本』、2017年5月22日付 (<https://jp.sputniknews.com/culture/201705223657784/>) (最終閲覧日:2019年4月5日)。

字が次のように刻印されている。

ЦРЪИВЕ

ЛКІКНСЪБ

ОРІСЪФЕДО

РОВИЧЪВС

ЕАРУСИ

これを現代ロシア語に直すと Царь и Великий Князь Борис Федорович Всея Руси (全ルーシのツァーリおよび大公ボリス・フョドロヴィッチ) となる。

ロシア貨幣史家は、同じ重量のコペイカ銀貨とコペイカ金貨の価値を金貨1 = 銀貨10だったと考えている。またウゴルの金貨はコペイカの5倍の重さがあるので、ウゴルの金貨1枚の価値はコペイカ銀貨50枚と等しいことになる。

### 3. エレナ・グリンスカヤの幣制改革とイワン4世

なぜボリスがウゴルの金貨を発行したのかを考えるために、ボリスが帝位につくまでのモスクワの歴史を振り返ってみよう。

1533年にイワン4世はわずか3歳でモスクワ大公位を継いだが、幼少のため生母エレナ・グリンスカヤが摂政となった。このエレナ摂政期(1533年～1538年)に幣制改革がおこなわれ、コペイカ銀貨のみが全ルーシの硬貨とされ、他の公国の硬貨やプロ銅貨は流通停止となった。

「コペイカ (カペイカ)」とはケベキ銀貨のことである。1320年に中央アジアのチャガタイ家当主ケベクはそれまで金貨だったディナール貨を銀貨で作り、1ディナール銀貨 = 6ディルハム銀貨と定めた。これ以降、中央アジアではケベクの銀貨が標準、あるいは理想の銀貨とされ、ケベクのディナールは「ケベキ」と呼ばれるようになった。<sup>4</sup>ケベキという単語はロシア語に取り入れられ、指小形の「カペイカ」で定着した。<sup>5</sup>

4 間野英二 (1977) 『中央アジアの歴史』、講談社現代新書、153頁。

5 Орлов, А. и Борисенко, Н. (2007) , От монет пришельцев — к рублям и копейкам,

ルーシで最初に硬貨を統一したエレナ・グリンスカヤはモンゴル系の大貴族出身だった。エレナがルーシのツァーリに嫁いで権力を握った背景を理解するためには、モンゴル帝国史を振り返る必要がある。

1206年にチンギスカンは現在のモンゴル高原に住むすべての遊牧民を統合したとして、「大モンゴル国」の成立を宣言した。大モンゴル国は88人の千人長（ミンガン・ノヤン）が率いる95個の千人隊（ミンガン）<sup>6</sup>と、これらから集めた10個の千人隊からなる大中軍<sup>7</sup>から構成されたと『秘史』では描写されている。千人隊とはだいたい1,000人ほどの兵士を編成できる遊牧民の集団である<sup>8</sup>。千人長にはチンギスカンの僚臣（ノコル）およびチンギスカン一族と婚姻関係のある部族の長が選ばれた。

チンギスカンはモンゴル部族のキヤト氏族の出身であり、チンギスカンとその弟の子孫はボルジギン・キヤト氏、別名「黄金氏族」と呼ばれた。他にもキヤト氏族に属する家系はあるが、チンギスカンの異母弟ベルグテイ・ノヤン以外で千人長に任命された者はわずか3名しか確認できない。

統一以前のモンゴル部族の中心はタイチウト氏族で、またおそらく西遼（カラキタイ）の代官であったジャジラト氏族のジャムカ（グル・カン）がモンゴル部族を率いており、キヤト氏族の大部分もその配下にあった。チンギスカンは西遼と対立する金朝に従属していたケレイト部族長オン・カンの配下であり、したがってチンギスカンはモンゴル部族の中では非主流派であったと考えられる<sup>9</sup>。

Банкаўскі веснік, ЛІПЕНЬ 2007, стр.60-64.

6 『秘史』（村上正二訳注『モンゴル秘史：チンギス・カン物語』1～3、東洋文庫、平凡社、1970年～1976年、小澤重男（1997）『元朝秘史』上・下、岩波文庫）、§ 202。

7 『秘史』、§ 224。

8 『元史』、卷98、兵一。

「蒙古軍皆国人、探馬赤軍則諸部族也。其法、家有男子、十五以上、七十以下、無衆寡盡簽為兵。十人為一牌、設牌頭、上馬則備戰鬥、下馬則屯聚牧養。」

（訳）蒙古軍はみなモンゴル人で、タンマチ軍はモンゴル諸部族の人びとのことである。その法は、一つの天幕に男子がいて、15歳以上70歳以下であれば、多少に関係になくすべて集めて兵とする。10人を1ハルバンとし、ハルバン・ノヤンをおき、馬に乗れば戦いに備え、馬を下りれば集まって牧畜をする。

9 松田孝一（2015）「チンギス・カンの国づくり」、白石典之編著（2015）『チンギス・カンとその時代』、勉誠出版、1頁～28頁。安田公男（2017）『金史』に現れる人物「障葛」

タイチウト氏族やジャムカとの戦いの中、一貫してチンギスカン側についていたのはキヤト氏族の中ではチャンシウト・キヤト氏のメゲト（モンゲト）・キャン一族だけで、大モンゴル国成立によりメゲトとその孫ゲウギ（メゲトの子チャンシウダイ（チンギス・カンの従兄弟）の子）が千人長となったのである。『集史』にもクキ・ノヤンとメゲト・ノヤンの千人隊に関する記載があり、クキ・ノヤンとはゲウギのことであろう。<sup>11</sup>

『集史』によるとキヤト部族千人隊は大モンゴル国の右翼に属し、チンギスカンの末子トルイ配下であった。その後、キヤト部族の一部分はジョチ朝に所属し、ジョチ朝では万人隊を率いるようになった。<sup>12</sup>

---

について」、『13 - 14 世紀モンゴル史研究』、(2)、81 頁～83 頁。なお、『秘史』、§ 141 には、酉の年（1201 年）のこととして、ジャダラン（ジャジラト）氏族のジャムカを西遼の君主の称号であるグル・カン（グル・カー）に推戴してオン・カンとチンギスカンを攻撃したという記事がある。ジャムカ陣営にはタタル部族、メルキト部族、オイラト部族、ナイマン部族、コンギラト部族に加え、モンゴル部族のタイチウト、カタギン、サルジウトといった有力氏族が参加しており、ケレイト部族に従属していたチンギスカンの集団はモンゴル部族のはみ出し者たちであったと思われる。

10 『秘史』、§ 120。村上訳注（1970）、225 頁～226 頁。

11 『集史』、第 1 巻、第 1 部「部族史」、第 4 章、第 1 節序文（Рашид-ад-дин, “СБОРНИК ЛЕТОПИСЕЙ(ДЖАМИ АТ-ТАВАРИХ)”, Раздел четвертый, Упоминание о тюркских племенах, прозванием которых в давнее время было монголы, от которых появилось много племен, как то будет подробно изъяснено [ниже], ГЛАВА ПЕРВАЯ четвертого раздела, Упоминание о тюркско-монгольских племенах, называемых дарлекин, кои суть колена и племена, происшедшие от рода [племен] нукуз и кият, ушедших на Эргунэ-кун и существовавших до времени Дубун-Баяна и Алан-Гоа([http://www.vostlit.info/Texts/rus16/Rasidaddin\\_2/kniga1/frame-text4.html](http://www.vostlit.info/Texts/rus16/Rasidaddin_2/kniga1/frame-text4.html)))。

12 『集史』、第 1 巻、第 2 部、第 2 章「チンギス・カン紀」、第 3 節「千人隊一覧」。ЧАСТЬ ТРЕТЬЯ, ПАМЯТКА об эмирах туманов и тысяч и о войсках Чингизхана. РАЗДЕЛ, Те, которые принадлежали к правой руке и левой, т.е. к мейманэ [правому крылу] и мейсарэ [левому крылу], – было сто тысяч человек. Правое крыло [мейманэ]....Тысяча Куки-нойона и Мугэду-Кияна, сыновей Кияна. Племя кият, которое в настоящее время находится у Токтая и о котором говорят, что оно составляет один туман, и большинство других киятов суть из их потомства [насл].([http://www.vostlit.info/Texts/rus16/Rasidaddin\\_2/kniga2/frame-text11.html](http://www.vostlit.info/Texts/rus16/Rasidaddin_2/kniga2/frame-text11.html))).

1236年から1242年まで、モンゴル帝国はジョチの次男バトを総司令官としてキプチャク草原、すなわち現在のカザフスタンからドナウ河口に広がるステップに対する征服戦争をおこない、キプチャク草原とその周辺地域を支配下に置くことに成功した。この征服戦争は「バトの征西」と呼ばれる。バトの征西では1230年前後にタンマチ（探馬。先鋒鎮守軍）<sup>13</sup>として全モンゴルから兵士が徴集されたことから<sup>14</sup>、ゲウギの一族もこのバトの征西により移動してきたのであろう。

ジョチ朝第10代当主ウズベクの時代にはキヤト部族長イサタイが大きな権力を有し、その甥キヤト・ママイにはウズベクの孫第13代当主ベルディベクの王女（公主）が嫁ぎグレゲン（附馬。皇帝の娘婿）となった。<sup>15</sup>

1359年にベルディベクが死去すると、ジョチ朝では後継争いがつづき、混乱状態の中、ジョチ朝右翼は事実上ママイが支配するようになったが、ママイは1380年にクリコヴォの戦いでモスクワ大公ドミトリーに負け求心力を失い、バルラス部のティムールの支援によりジョチ朝左翼を統合したトクタミシュに討たれた。

その後、ママイの子マンスール・キヤトの子孫はポーランド・リトアニア連合に移り大貴族グリンスキー家になったとされる。16世紀初頭にはミハイル・グリンスキー公がポーランド、リトアニア、モスクワで勢力を拡大し、兄弟のワシリー公はセルビア王女アンナを娶った。このワシリー公とアンナ王女との間に生まれたのがエレナ・グリンスカヤである。

エレナはワシリー3世死後、イワン4世の摂政としてモスクワ大公国を統治し、スウェーデンやリトアニアとの講和に尽力し、また、ルーシで初めてとなる貨幣統一をなしとげたが、おそらくシュイスキー家を中心とした反対勢力によって暗殺された。

長い間子どものできなかったワシリー3世は教会の反対を押し切って妻と離婚し、若くて美人なエレナと再婚し、エレナはサーミ人の魔女を呼び寄せ魔力で妊

---

13 タンマチについては、松田孝一（1998）「宋元軍制史上の探馬赤（タンマチ）問題」『宋元時代史の基本問題』、汲古書院、153頁～184頁を参照。

14 川本正知（2013）『モンゴル帝国の軍隊と戦争』、山川出版社、103頁～104頁。

15 川口琢司（1997）「キプチャク草原とロシア」、川口（1997）『中央ユーラシアの統合』、岩波講座世界歴史11、岩波書店。

娠したなどという話が残っている。エレナへの悪評は、エレナの反対勢力が権力を握ったことから定着したのであろうが、オリジナリティーに欠ける内容である。

「妻は年若だが、良人のわしは年老いたわい。このタヤン・カン<sup>16</sup>は祈祷によってうまれさせたものだったが、ああ意気地なしに生まれたわが子は意気地なし者で、多くの、下等で、性悪の人民どもの面倒を見取って行けるだろうか」。

モンゴル高原の中央から西部に大きな勢力を有していたナイマン部族はチンギスカンによって討伐され吸収された。ナイマン部族長タヤン・カンに対し、老齢の父が祈祷を使って若い娘が産んだ子であり意気地なしでカンたり得ないと父が嘆いていたとする場面であるが、エレナの結婚とほぼ同じ話であり、中央ユーラシアにおいて広く見られた定型の非難文であったと思われる。

ワシリー 3世がエレナと再婚したのはエレナが若くて美人だったからというのは皮相な見方である。エレナは13世紀に成立したモンゴル帝国を構成した名族の出身であり、北東ルーシを統一したモスクワ大公国にとってグリンスキー家との婚姻は、グリンスキー家がポーランド、リトアニア、スウェーデン、セルビア、クリムなどとの関係が深いことから外交的にきわめて重要な意味を持っていたと考えられるのである。

#### 4. ボリス・ゴドゥノフの即位と金貨

エレナ・グリンスカヤの幣制改革によってルーシではじめて硬貨が統一されたものの、コペイカ銀貨は1枚の価値が大きすぎたため流通に支障をきたし、民間ではコペイカ硬貨を半分や3分の1に切ったり、革製通貨を作り出したりして小額貨幣の不足に対応していた。<sup>17</sup>

16 『秘史』、§ 189。

17 Прохорова, Н.В. (2007) *Монеты и банкноты России*, ООО Дом Славянской Книги, стр.56.



1547年にイワン4世は史上初めてツァーリとして戴冠した<sup>18</sup>。ツァーリはモンゴルのカンのロシア語訳であり、1480年に大オルダ（ジョチ朝の自称）への定期的貢納をやめたが、イワン4世になって初めてカンから任命されなくてもモスクワ大公が自身の力で全ルーシの君主になれることを内外に表明したのである。

その後、1575年にイワン4世は退位しモスクワ公と名のつた。その代り軍司令官でジョチ家出身のシメオン・ベクブラトヴィッチをツァーリとした。ただ翌年にはシメオンをトヴェリ大公とし、イワン4世はツァーリに復位した。こうしてイワン4世はチングスカンの子孫からツァーリ位を受け継ぐという名分をえた。

イワン4世は生涯7度の結婚をしているが、最初の妻アナスタシヤ・ロマノヴァ・ザハリナとの間には3人の息子、長男ドミトリー、次男イワン、三男フョードルが生まれ、長男は幼くして亡くなったため次男イワンが後継者となった。また、最後の妻マリヤ・ナガヤとの間にドミトリーが生まれた。1581年にイワン4世は後継者のイワンとその妻を殺してしまい、三男フョードルが跡継ぎとなったが、彼は心根はやさしいが知恵遅れだったとされる。このフョードルの妻がイリナ・ゴドゥノヴァで、ボリス・ゴドゥノフの妹である。フョードルとイリナの間には女の子はいたものの男の子は生まれなかった<sup>19</sup>。

1584年にフョードルがツァーリになると、義兄ボリスが実権を握ることとなり、この間、スウェーデンとの戦争に勝ち、西シベリアに版図を広げ、イギリス女王エリザベス1世と良好な外交関係を保った。また、1589年にモスクワ府主教が総主教となり、コンスタンティノープル総主教と同格になり、ルーシ・モスクワの宗教的権威も高まった。

しかしながら、16世紀末のルーシの農民は度重なる飢饉と重税により苦しめられ、農地を離れて東部や南部国境へ逃げ出していき、国家は危機に瀕していた。

こうした中、1591年にドミトリーが9歳で亡くなり、1598年にはフョードルも死去しリューリク王朝が終わりをつげ、フョードルの妻の兄にあたるボリスがツァーリとなった。ボリスのツァーリとしての治世は1598年～1605年であるが、

---

18 ウォーンズ・デヴィッド（栗生沢猛夫監修、月森左知訳）（2001）『ロシア皇帝年代記』、創元社、37頁。

19 以下、事実認識は栗生沢猛夫（1997）『ボリス・ゴドノフと偽のドミトリー：「動乱」時代のロシア』、歴史のフロンティア、山川出版社を参照。

実質的には1586年頃から政権を担っており、またツァーリ位にあった期間は重病だったとされる。

フォードル死去時のツァーリ位の継承候補者は2人いて、1人はボリス、そしてもう1人がシメオン・ベクブラトヴィッチであった。すでに述べたように、シメオンはイワン4世時の軍司令官であり、1574年には実際にツァーリに即位しており、退位後はトヴェリ大公とされた。また、シメオンの妻はリューリク家一門の大貴族シュイスキー家の出であるなど大貴族からの支持もあって即位の可能性は十分あった。ボリスはシメオンからトヴェリ大公位を取り上げて幽閉し、シメオン即位支持の声を抑え込もうとした。

ボリス・ゴドゥノフを輩出したゴドゥノフ家もモンゴル系(ロシア語ではタタール) 貴族を自称したが、ジョチ家出身ではなかったようである。ルーシの大貴族の家系の内、ジョチ家と後にはマンガト部族長家(ユスポフ家、ウルソフ家など)、リューリク家、リトアニア王家の3系統が強大で、どれにもあてはまらないボリス・ゴドゥノフの即位は、逆に最有力家系でなかったから可能になったのであろう。ゴドゥノフ家の断絶といわゆる「動乱」期を経て成立したロマノフ朝も、イワン4世の最初の妻がロマノフ家出身で、しかもやはり最有力家系でなかったことから全国会議でアレクセイ・ロマノフがツァーリに選ばれた結果できたものだった。

フォードルの死直後にクリミア軍がモスクワに侵攻しつつあるとの情報を得たボリスは多数の貴族と共に大軍を率いてセルプホフに陣取った。実はクリミア軍はポーランド・ハンガリー方面に進軍中で、モスクワには向かっておらず、クリミアの使者はボリスが大軍を率いているのを見て驚いたという。この時ボリスが大軍を集めたのは、クリミアの脅威を煽ることで軍を掌握し、貴族を自らの近くに留めて反乱が起きないようにするためだったと考えられる。

ボリスはセルプホフで貴族および将兵に多くの金品を与えたとされる。セルプホフ駐留時にはツァーリになっていなかったが、その後、モスクワでの即位式ではモスクワ市民に酒を大盤振る舞いし、将兵には恩賞を与え、即位に反対ないし消極的抵抗をしていた貴族も昇進させるなど、社会の幅広い層からの指示獲得を狙った。ウゴルの金貨は家臣への恩賞用であったとされる。

1601年～1603年には大飢饉が発生し、死んだドミトリーは実は生きてると騙る男「偽ドミトリー1世」の軍がポーランドの支援を得てモスクワに侵攻す

る中、1605年にボリスは死去し、まもなく息子フョードルも殺害され、ゴドゥノフ王朝は短命に終わったのである。

#### 4. 残された課題

図1は図2とは明らかに形状が異なっており、細長い線にした金を一定の重量ずつ切り、それを延ばした金属片に刻印したもの、すなわちいわゆる針金硬貨(Russian wire coin)と呼ばれるものであり、デンガ銀貨、コペイカ銀貨、プロ銅貨といったモンゴル支配期後半(1360年以降)に特徴的なルーシの貨幣製造法が採られている。

ウゴルの金貨が賜与用であったのに対して、コペイカ金貨は銀貨と同じく市場流通用であったのではないか。

興味深いことに15世紀後半から、すなわち戦国時代から日本では金の貨幣化が進み、<sup>20</sup>金貨の製造が制度化されていく。また、豊臣秀吉が発行した天正大判という金貨は賜与用だったと考えられてきたが、支払手段としての使用もあったというのが最近の説である。<sup>21</sup>大判と小判の製造というルーシと同じ現象が見られるのである。

コペイカ金貨の使用状況について考えることと、15世紀になぜ日本とロシアで同時並行的に金の貨幣化が進んだのか比較研究することが今後の課題となる。

図1 コペイカ金貨



20 田中浩司(2003)「十六世紀前期の京都真珠庵の帳簿史料からみた金の流通と機能」、峰岸純夫編(2003)『日本中世史の再発見』、吉川弘文館、303頁～323頁。

21 川戸貴史(2017)『中近世日本の貨幣流通秩序』、勉誠出版、64頁～81頁。

注) ルーシの伝統的な貨幣の型式、いわゆる針金硬貨 (wire coin) である。左側にはイワン3世時に導入されたビザンツ帝国の国章である双頭の鷲と、鷲の胸に馬に乗った聖ゲオルギオスが刻印されている。

出所) <https://www.russian-money.ru/coins/gosudarstvo-rossijskoe/boris-godunov/zolotaya-kopejka-1598-1605--5009> (最終閲覧日: 2019年4月5日) .

図2 ボリス・ゴドゥノフ帝のウゴルの金貨 (チェルヴォネツ)



注) 欧州風の皇帝の肖像画が刻印された金貨であり、ルーシの伝統的な貨幣の型式とは異なっている。ロシア国立エルミタージュ蔵 (OH-P-A 3 -27)。

出所) Suptnik International, ([https://sputniknews.com/art\\_living/201705212053825947-priceless-coin-river-discovery/](https://sputniknews.com/art_living/201705212053825947-priceless-coin-river-discovery/)) (最終閲覧日: 2019年4月5日)

※本稿は、JPSP 科研費 16H01953 (基盤 (A) 「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」、代表: 鶴島博和・熊本大学教授) の研究成果の一部である。